

だ い ず 通 信

令和5年 第1号

大豆のは種作業が始まります。
初期病害の発生を抑えるため、種子消毒は必ず実施しましょう。
は種後は速やかに土壌処理剤を散布しましょう。

1 ほ場準備

- ・転作田で水が溜まるほ場は、額縁明きよやサブソイラを施工し排水対策を行う。
- ・耕起、碎土は大豆の出芽・苗立ちに影響するため丁寧に行う。
- ・完熟堆肥等の有機物を施用し、地力向上を図る。
- ・作付前に土壌診断を行い、pH5.5～6.5を目標に苦土石灰等を施用する。
- ・施肥は、おおすずやオクシロメ等の中・晩生種では基肥窒素成分で10a当たり2～3kgを基準とするが、ほ場の地力によって増減させる。

表-1 基準施肥量（10aあたり成分量）

品種名	窒素	りん酸	加里
中・晩生品種 （おおすず、オクシロメ）	2～3kg	10～15kg	8～10kg

2 は種作業

- ・は種量は慣行で7～8kg/10aを基準とし、品種やは種時期により増減する。
- ・種子消毒を徹底する。

表-2 慣行栽培のは種量（5月下旬～6月上旬は種）

品種	は種時期	条間 (cm)	は種量 (kg/10a)	栽植本数 (本/10a)
おおすず	5月中～下旬	60～80	7～8	20,000
	5月下～6月上旬	60～80	8～10	20,000～ 25,000
オクシロメ	5月下旬	70	4～5	14,200
シュウリュウ	5月下旬～6月上旬	70	5～6	15,000

表-3 種子消毒で使用できる薬剤

薬剤名	適用病害虫	使用方法	使用回数
クルーザーMAXX	紫斑病、茎疫病、黒根腐病、アブラムシ類、ネキリムシ類、ハト・キジバトによる種子食害忌避	乾燥種子1kg当たり原液8ml塗抹	1回
キヒゲンR-2フロアブル	紫斑病、タネバエ、ハト・カラスによる種子食害忌避	乾燥種子1kg当たり原液20ml塗抹	1回

3 除草作業のポイント

・除草作業は、大豆や雑草の生育に合った作業を選択し、効果的な時期を見極めて行う。

表-4 除草作業の時期とポイント

大豆の生育状況	作業時期の目安	作業内容
大豆は種前	は種作業の 3～7日前	【耕起】 ・雑草は確実に土中に埋め込む。 【非選択制除草剤の散布】 プリグ ロックスL等 ・スギナやツユクサ等除草剤が効きにくい雑草が多い場合に行う。散布前は耕起せず、できるだけ雑草を出芽させる。
大豆は種直後～発芽前まで	は種直後～3日	【土壌処理除草剤の散布】 ・土壌処理除草剤は発芽前または発芽直後の雑草に効果が高い薬剤のため、は種後速やかに散布する。
本葉1～3葉期	は種後10～30日	【茎葉処理除草剤の散布】 ・雑草の発生が多いほ場や、中耕・培土作業が十分行えない場合に行う。 ・大豆5葉期以降は株元の雑草に薬液がかかりにくくなるため、早めに散布する。
3葉期～6葉期	は種後30～45日	【中耕・培土の実施】 *1回目は中耕のみで可 ・作業は、大豆2～3葉期(は種後30日)と5～6葉期(1回目の2週間後)を目安に2回行う。 ・雑草が大きくなるとすき込みきれずに再生するため、注意する。 ・作業は開花前までに完了する。

技術情報

- 栽植密度(は種量)と大豆の生育-

大豆には、次の2つの性質があります。

- ① 密植(は種量が多い)ほど伸びやすく着莢位置が高くなり、疎植(は種量が少ない)ほど短く倒れにくくなる。
- ② は種時期が早いほど葉の枚数が増えて旺盛に生育し、遅いほど短く倒れにくくなる。

これらの性質を生かし、収穫時の課題解決に向けたは種作業の工夫を紹介します。



課題

- ・野菜跡等で地力がある。
- ・倒伏しやすい。

対策

- ・は種量を減らす(または条間を広げる)
- ・は種時期を遅くする
⇒短稈で倒伏しにくくなる

課題

- ・汚損(土汚れ)が多い
- ・地際の刈り残しを減らしたい

対策

- ・は種量を増やす(または条間を狭める)
⇒着莢位置が高くなり収穫作業がしやすくなる